―エッセー第20号―

熱帯に生きる

谷口　巳三郎
鹿児島大学
「国際協力農業体験講座」研修記録
（1999年12月18日～27日）

■メコン河で流した歌がチェンマイのエアポートで還ってきた

～鹿児島大学女子学生グループを通じて～

「知らない町を歩いてみたい　何処か遠くへ行きたーい　知らない人とめぐり合いたい　何処か遠くへ行きたーい・・・」の歌声が突然メコンの河面に流れる。昔はもっと張りのある美しい声であったが、今、年のせいで多少衰えたトーンは私の満足のゆくものではなかったが、私はここぞと思うときにその場の雰囲気に合わせた歌を即興的に何ら躊躇することなく臆することなく歌うことにさほど抵抗を覚えない。

鹿児島大学学生25名を背にして、私はタイ、ラオスの国境を流れるメコンの河辺に立ち、悠々と流れる大河の果ての見知らぬ国々まで届けとばかりに情感を込めて唄った。タイ北部、河幅３００ｍの対岸に瓦やトタン葺きのラオスの民家を数十軒望む鄙（ひな）びた国境の田舎町チェンコン、アジア大陸の奥まった此の地の昼下がり、乾季に入った太陽がキラキラとヒマラヤより発した此の大河の河面に照り映える中、私の胸に沸々と滾（たぎ）る青年への期待と発展途上国の開発に傾ける情熱のなさしめた演出だった。

ではなぜ私は此の地でこの様な時に、この様な歌を唄うことになったのか。これに就いて述べるには此の25名の日本の大学生の今回の旅行の目的と、そして彼らと私との関わり合いに就いて語らねばならない。

◇

これは鹿児島大学が国立大学としては初めて実施した発展途上国での現地研修「国際協力農業体験講座」のカリキュラムの一つとして私が「メコン河と国境を学習する」為に組んだスケジュールで、もともと鹿児島大学からの提案をもとにして私が現地にあったスケジュールにしたものである。

私は、日本の文部省が履修単位として初めて認定したという、今回の外国での体験実習の試みが、今日の世界の情勢の中での日本の国際協力や、途上国開発の在り方、ＯＤＡ資金の合理的な活用等を考える上で、時宜を得た試みであり、第一回目にあたるこの研修を是非とも成功させたいと願望していた。

そして、これらの活動の第一線に立つには、自分自身が彼らと同じ青年の情熱を持つ者であるべきだと考えている。

私は一年前より「青年の船」の試みを更に一歩進めて、日本の大学生三百～五百人位を休暇を活用して一，二ヶ月間大学の履修単位に認めて途上国の現地でワークキャンプを実施する案を練っていた。そんな折りに鹿児島大学の短期ではあるが体験講座の話が出て、それを私の農場で実施したいという申し出を受け双手を挙げて賛成したのである。

１９９９年の12月の下旬の６日間の農場での研修に、私は私のタイでの農村開発の17年のキャリアと私の持つ人脈をフルに活用した研修プランを作り、それを実施した。その内の一つがこのメコン河畔での研修であった。

◇

私の歌はタイとラオスの間を流れる濁流滔々たるメコン河に乗って下流の方、カン

ボジャ・ヴェトナムへと流れ去っていった。ところが、この流れ去って、南シナ海に飲み込まれてしまったと思っていた私の歌が、それから8日の後、チェンマイの空港で夜も8時過ぎて私の所へ戻ってこようとは予想もしなかった。この様な云い方はおかしく聞こえるかもしれないが、後日談があるのである。

メコン河畔に繋がれた木造フロート上の水上レストランで私が唄った2日後、鹿児島大学の学生はタイでの1週間の研修を終え、その夜の9時過ぎの飛行機でチェンマイからバンコックへ出発することになっていて、私はスタッフのビンとふたりで彼らを空港に見送った。

彼らが搭乗手続きをしている間に私は一人一人と握手しながら別れの言葉を交わし、「これからまた4時間、車でパヤオの農場まで帰らねばならないから・・・」と、中途でロビーから辞去してビンと駐車場に止めた車に乗り込みエンジンをスタートさせたところ、車の窓を叩く音がした。外を見ると朧な外灯の光の中に今さっき別れてきた5，6人の娘たちが立っていた。何事かしらと窓を開け「何?」と問うと、「お別れに歌を唄いたい」と云う。「何を唄うの?」「先生の好きな〈遠くへ行きたい〉を」そして皆で唄いだした。勿論私も、後半はむしろ歌詞を良く覚えている私がリードしながら、車の窓枠に肘をかけ一緒に唄った。「何処か遠くへ行きたーい 知らない人を愛して見たい 青い海 遠い空夢遙か 独り旅　何処か遠くへ行きたーい・・・」

今の私にとって、そしてこの娘たちにとってもまさにぴったりの歌であった。車の一角を叩いて軽く拍子をとりながら歌っていると、一週間の研修の模様が走馬燈の如く脳裏に浮かびきて思わずにじみ出る涙を抑えることができず歌声も途切れがちになるのをどうすることもできなかった。

歌い終わり尚名残尽きず去りがたい態の彼女たちに、「さあ、飛行機に乗り遅れますよ」と云い、再びエンジンを駈け別離を促すより他にこみ上げてくる涙を誤魔化す術はなかった。

ラオスとの国境を流れるメコン河に浮かぶフローティングレストランで河面に流した「遠くへ行きたい」の歌が、2日の後、チェンマイの飛行場で私のもとへ、限りなく愛しい娘たちを通して還ってこようとは!!感謝感激の極みというべきだった。真っ暗な山道を抜け4時間かかって農場へ帰る道すがら、私は別れてきた彼女たちの上に思いをはせ、皆に幸あれかし、そして修学研鑽の成果を人類のために尽くして欲しいと願いつつ、真夜中過ぎ、迎える者もない住み慣れし我が家に着いたのだった。

谷口先生の２１世紀農場を訪れた多くの若者達は、学校の授業では知ることのできない知識や、日常生活では学ぶことのできない体験に触れ、今までの軽佻浮薄な価値観は吹き飛び、生きる事のほんとうの意義を見出す。

今回農場で研修を行った鹿児島大学農学部の学生の皆さんも大変衝撃を受けました。

以下はタイでの研修後、谷口先生に送られてきた感動の手紙の一部の紹介です。

＃1

タイでの農業研修は大変勉強になりました。私は、将来農業を主とした国際協力をしたいと考えているのに、まだ一度も日本国外に行ったことがありませんでした。一般のボランティア団体が実施している海外ボランティアにでも参加したらよかったのですが、学校の授業があったり、部活があったりして行く時間がありませんでした。

今回のタイへ行った国際協力農業体験講座は、大学の授業の一部といういことだったので、何の心配もなく行くことができて良かったと思います。そして実際に海外へ行ってみることで、たくさんのことを学ぶことができました。特に、語学力不足や農業の知識不足など、自分の未熟さを実感しました。

一番印象に残ったのは、アカ族の村を訪問したことでした。子ども達は元気でかわいらしく、兄弟がたくさんいて、みんな生き生きとした感じがしました。それに、アカ族の人たちは私たちに親切にしてくれ、大変恩を感じました。その他にもタイ北部の地域をいろいろと見学し、考えることがたくさんありました。タイの研修を経験して日本に帰った今、私の心の中に一つの悩みができました。それは国際協力に対する考え方です。私は中学、高校時代は当時の自分なりに自信を持った国際協力の考え方があり、将来は必ず人の役に立つんだと考えていました。しかし今は国際協力について、肯定的な意見、否定的な意見を聞き、どんな人がほんとうに現地の人の役に立ち、喜ばれるのだろうかと思うようになりました。今のうちにしっかりとした意見や考え方を持ちたいと思います。

私はまだ18歳なので、少しぐらい留年してもいいので、いろいろな国へ行って、多くの事を学びたいと思っています。まずは中国の雲南省への留学を考えています。

21世紀農場にいる時に2回も夜にお邪魔して迷惑をかけてすいませんでした。けれど、谷口先生のお話は心に残り、今後の自分の人生に大きく影響すると思います。

今回の研修のスケジュールを考え、一緒に同行してくれた谷口先生には非常に恩を感じています。本当にありがとうございました。いろんな国へ行ったら手紙を書こうと思いますので、暇があれば見てください。よろしくお願いします。

＃2

今日は、先生お元気ですか。お身体にお変わりはないでしょうか。私は元気にしています。先生にタイでお会いしてから早一ヶ月が過ぎ、だいぶ私の生活も落ち着いたところです。

先日の国際協力農業体験講座の際は大変お世話になりました。日本に帰ってから、準備の段階から先生が私達のために並々ならぬ御尽力をして戴いていたことを知り、より感謝の念を深めております。本当にありがとうございました。あの十日間で得たことは言葉で容易に語り尽くすことはできません。タイでの十日間は生きていくうちに何度か訪れるはずであろう人生の節目の一つであったと思っています。

国際協力を志す者としてタイまで行き、心に残ったことというのは無数にあるのですがその一つに先生のエッセイの御朗読があります。戦争時の辛い思い出を涙を流して聞かせて下さった先生、今の私達には想像さえできない思いをなさってきたのだ、背負っているものが違うのだと思いました。こんな様々な経験をし、様々な思いを胸に持つ人に、私達は来る未来を委ねると言われているのだと思うと、一体私達に何ができるだろうかと、涙が後から後からあふれてきました。

私達が何をすべきなのか、一体私にできるのか、具体的なことはまだ分かりませんが今はとりあえず、やりたいと思う気持ちがあれば、道は開けるだろうという確信があります。もちろん、そのための努力を怠

るつもりはありません。
　あっという間だった十日間の講座で得た「知識」というのは本一冊にも満たないかもしれません。しかし、現状を見たこと、聞いたこと、舌で味わい、肌で感じたことというのはこれからの私の原動力となり、私を私の方向へと突き動かしていくでしょう。先生が蒔いて下さったたくさんの種を必ずや発芽させ、ぐんぐんと伸ばしていきたいと思います。またとない機会をつくって下さった先生に、心から感謝しています。ありがとうございました。
　ビンさん、カニタさんをはじめ、ヨハンさん、ダエイさん、赤塚さん・・・とお世話になった方々を挙げていくときりがありませんが、皆様にもありがとうございましたと宜しくお伝え下さい。
　追伸
　できれば今度の夏再びタイを訪れたいと思っています。先生にまたお会いするまでに一生懸命勉強して先生との再会にたえる自分になろうと決意しています。そのときはまたウェルカムしてくださいますでしょうか・・・。
　先生の御健康とますますの御活躍をお祈り申し上げます。そうぞ御自愛下さい。

＃3

　谷口先生、先日は大変お世話になりました。その後いかがおすごしでしょうか。鹿児島大学農学部の朝比奈です。
　タイでの10日間の研修は、私にとってとても貴重な時間でした。今まで、日本という小さな国にいて、知らないことがいっぱいあり、考え方も狭かったことを気付かされました。そして、自分がとても恵まれた環境にいることがよく分かりました。
　今回のタイの研修がなかったら、なんとなく大学にいるだけで終わってしまうのではないかと思います。とてもいい刺激になり、これからの自分のやりたい事、学ばなければならない事が少しつかめたし、いいきっかけになったと思います。また、長期休業になったら、（春休みか、夏休み）21世紀農場に勉強に行ってもいいですか？
　これから、積極的な姿勢で大学生活を送れるよう、がんばりたいと思っています。本当に、タイに行って、谷口先生に会えて良かったです。
　では、いろいろとお忙しいと思いますが、お身体に気を付けて、がんばって下さい。

制作・発行
タイとの交流の会
会長　谷口恭子
〒861-1201
菊池郡泗水町冨原二〇五-一八
☎0968-38-3035